

展転の系譜

佐藤 大志

一、問題の所在 — 「展転の思ひ」 —

臨邛道士鴻都客 臨邛の道士 鴻都の客
能以精誠致魂魄 能く精誠を以て魂魄を致^{まね}く
為感君王展転思 君王が展転の思ひに感ずるが為に
遂教方士殷勤覓 遂に方士をして殷勤に覓^{もと}めしむ

右は、白居易「長恨歌」の後半部分、玄宗の歎きに感じた道士が楊貴妃の魂を求めようとする場面である。ここで、白居易は亡き楊貴妃を思う玄宗の歎きを、「展転の思ひ」と表現する。この「展転」が、『詩経』周南「閔雎」「悠哉悠哉、輾転反側」を出典とし、愛する相手を求めて夜も眠れず、寝台の上で何度も寝返りをうつ動作を言うことは、改めて指摘することもないであろう。稿者も『詩経』以来の伝統ある詩語として、これまで特に意を払っていなかった。しかし、或るとき『詩経』から白居易までの詩に於ける「展転（輾転）」の用例を確認したところ、そこに際だった特徴があることに気付いた。

それは、「展転」の用例は、漢、三国、西晋、劉宋の詩には見出せるのだが、齊梁期から初唐期の詩には、その用例が一例も見出せなくなり、盛唐期に至って、再び詩に用いられるようになるということである。なぜ詩語としての「展転」は、齊梁期に突如として用いられなくなったのだろうか。

二、『詩経』及び漢代の「展転」

『詩経』周南「閔雎」
窈窕淑女、寤寐求之。求之不得、寤寐思服。悠哉悠哉、輾転反側。
窈窕たる淑女は、寤寐に之を求む。之を求むるも得ず、寤寐に思服す。悠たるかな悠たるかな、輾転反側す。

右は、「展転」の出典とされる『詩経』周南「閔雎」である。詩序はこの作品を皇后が賢女を得て君子に勧め

んとする作品と解釈するが、^①現在では美しい女性を求め
る男性の心情を詠んだ恋愛詩と一般的に理解されてい
る。また『詩経』にはもう一例「展転」を用いた作品が
あり、こちらも男女の恋愛詩である。

『詩経』陳風「沢陂」

彼沢之陂、有蒲菡萏。有美一人、碩大且儼。寤寐無
為、輾轉伏枕。

彼の沢の陂、蒲と菡萏と有り。美たる一人有り、
碩大にして且つ儼たり。寤寐に為す無く、輾轉
枕に伏す。

詩序は、この作品を靈公の時に陳国の男女関係が乱れ
たことを憂えたものだと言う。^②しかし、朱子が言うよう
に、^③この詩も本来は男女の恋愛を詠んだ作品と解すべき
であろう。このように「展転」という語は、もともと男
女の恋愛と結びつき、「男女別離」の憂いによる「不眠」
の動作を示す語であつたと考えられる。

次に『詩経』以後の「展転」の用例を求めると、漢代
に至つて楚辞系の作品に見出すことができる。^④

劉向「九歎・惜賢」

憂心展転、愁怫鬱兮。冤結未舒、長隱忿兮。

憂心展転して、愁ひ 怫鬱たり。冤は結ぼれて
未だ舒びず、長く隠忿たり。

「憂心展転、愁怫鬱兮」の二句について、王逸は「展
転」の典故として「閔睢」を挙げ、「言己放弃、不得竭
其忠誠、心中愁悶、展転怫鬱、不能寐也。(言ふところは
己放棄せられ、其の忠誠を竭くすを得ず、心中愁悶し、
展転怫鬱として、寐ぬる能はざるなり。)」と、放逐さ
れて忠誠を尽くせないことを憂えて、眠ることができな
いと注す。劉向以前では、「展転」の語は用いないもの
の、漢初の莊忌「哀時命」が「幽独転而不寐兮、惟煩懣
而盈胸(幽独にして転じて寐ねられず、惟だ煩懣 胸に盈
つ)」と、世に認められない憤懣を抱いて眠れない士の
姿を描く。

この他に、漢代には古楽府や古詩に「展転」の語が見
える。

古楽府「飲馬長城窟行」^⑤ (『文選』卷二七)

青青河辺草、縣縣思遠道。遠道不可思、夙昔夢見之。
夢見在我傍、忽覚在佗郷。佗郷各異県、輾轉不可見。

青青たり 河辺の草、縣縣たり 遠道を思ふ。遠
道 思ふべからず、夙昔 夢に之を見る。夢に見
れば我が傍に在り、忽として覚むれば佗郷に在り。
佗郷 各の県を異にし、輾轉 見るべからず。

この作品は、故郷に残された女性が遠く旅して帰らぬ
男性への思いを歌つたものであるが、ここの「輾轉」に

閑しては、従来二通りの解釈がある。一つは男性が各地を転々としていることを指すとするもので、もう一つは眠れない女性の動作を言うとするものである。^⑥

『文選』李善注には、「字書曰、輾亦展字也。説文曰、展転也。鄭玄毛詩箋曰、転移也。」とあり、「輾転」を「移動・放浪」の意に解するようである。これに対して、呂向は「展転反側也。」と、先の「閑睢」を引いて「不眠」の動作と解する。

「展転」を「移動・放浪」又は「変化」の意と解釈する例は、『漢書』以下の史書に多くその用例を見る。『漢書』(『史記』の用例は未見)から『南史』までの史書の「展転」の用例を示すと、以下のようである。

なお、各引用の文頭に付した記号は、●が「変化・移動(放浪)」の例であることを示し、○が「不眠」の例を示す。以下、閲覧の便を考慮して、「展転」の引用句には、同様に●○印を付して、「不眠」、「変化・移動(放浪)」のいずれの意味で用いられているかを示すこととする。

- 『漢書』匈奴伝下「匈奴雖欲展転、奈失重利何、奈欺上天何、奈殺愛子何。」
- 『後漢書』王昌伝「十七、到丹陽。二十、還長安。展転中山、来往燕、趙、以須天時。」
- 『後漢書』趙岐伝「賊欲脅以為帥、岐詭辞得免、展転還長安。」

- 『後漢書』段熲伝「熲遂窮追、展転山谷間。」
- 『後漢書』西域伝「北虜呼衍王常展転蒲類、秦海之間、專制西域。」
- 『三国志』魏書・王朗伝「朗自由阿展転江海、積年乃至。」
- 『三国志』魏書・恭子就伝裴松之注引『世語』「三府並辟、展転仕進、至郡守・刺史・太僕。」
- 『三国志』蜀書・法正伝「展転反覆、与今計異、不為明將軍尽死難也。」
- 『三国志』呉書・周魴伝「每独矯首西顧、未嘗不寤寐勞歎、展転反側也。」(「誘曹休牋」)
- 『晋書』庾亮伝「皇家多難、未敢告退、遂随牒展転、便煩頭任。」
- 『晋書』張昌伝「由是郡县官長皆躬出驅逐、展転不遠、屯聚而為劫掠。」
- 『宋書』謝靈運伝「既入東南傍山渠、展転幽奇、異処同美」(「山居賦」自注)
- 『南齊書』張融伝「輾転縱横、揚珠起玉。」(「海賦」)
- 『梁書』王僧孺伝「又迫以嚴秋殺氣、具物多悲、長夜展転、百憂俱至。」(「与何炯書」)
- 『梁書』中天竺国伝「是以展転来達中国。」
- 『陳書』傅縡伝「各立新意、同学之中、取寤復別、如是展転、添糅倍多。」
- 『南史』張孝秀伝「有商人置諸楮中、展転入東林。」

例えば、『漢書』匈奴伝下の例は、顔師古が「展転為移動其心。(展転は其の心を移動すと為す。)」と注するように、匈奴がその意を翻して盟約に背くことを言い、次の『後漢書』王昌伝の例は、偽って成帝の子と称した王昌が、かつて中山の辺りを転々と放浪していたことを言う。以下、「不眠」の例は、『三国志』呉書・周紡伝、『梁書』王僧孺伝の二例のみ(いずれも書簡文の一節)であり、その他は「変化・移動」の意で用いられている。このように史書の「展転」は「変化・移動」の例として用いられる例が圧倒的に多い。

しかし、漢代以前の詩賦に於いては、「展転」をいずれも「不眠」の動作に用いている。

○杜篤「衆瑞賦」(『文選』「雪賦」李善注作「衆瑞頌」)

千里遙思、展転反側。

千里遙かに思ひ、展転反側す。

○秦嘉「贈婦詩」其一(『玉台新詠』卷二)

独坐空房中、誰与相勸勉。長夜不能眠、伏枕独展転。

独り空房の中に坐し、誰と与に相勸勉せん。長夜

眠むる能はず、枕に伏して独り展転す。

○蔡邕「青衣賦」(『初学記』卷一九)

寒雪翩翩、充庭盈階。兼裳累鎮、展転倒頽。

寒雪 翩翩として、庭に充ち階に盈つ。裳を兼せ

鎮を累ねて、展転倒頽す。

杜篤「衆瑞賦」は断句が数句現存するのみであり、引用句も謝惠連「雪賦」の李善注に、この二句が引用されるのみである。作品全体の内容は不明だが、ここは遙か遠くにいる相手も思つて眠れないことを言うのである。次の秦嘉「贈婦詩」其一は、『詩経』陳風「沢陂」(「伏枕」)を踏まえ、遠く離れた婦を思う男性が眠れないことを言う。この二作品は、『詩経』の例に近く、愛するものとの別れが「不眠」の原因とされている。蔡邕「青衣賦」は、卑賤の出身であるが故に、人に使役される婢女の憂いを詠んだ作品であり、引用箇所は、雪の降りしきる夜に寒さに耐える婢女の姿を詠む。ここで「不眠」の原因は、第一義的には寒さの為であろうが、その裏には不遇の憂いが有り、先の楚辞系の作品により近い。このように漢代詩賦の「展転」の例は、いずれも「不眠」の動作を示しており、史書の「展転」とは鮮やかな対照をなす。「飲馬長城窟行」の「展転」は、いずれの解釈も可能であろう。しかし、漢代詩賦の「展転」では「変化・移動」の意で用いられる例が見当たらないこと、また前段に女性が夢の中で愛する男性に会うとあることから考えて、この「展転」も「不眠」の動作を示し、現実では会うことができないう男性に、再び夢で会うことを願うも、思いが高ぶつて眠れない女性の姿を詠んだと解したい。

以上、『詩経』から漢代にかけての「展転」の用例を確認してきた。漢代以前の「展転」は、「不眠」の動作

と「変化・移動（放浪）」という二つの意味があり、詩賦では前者が用いられ、後者は『漢書』に用例があり、以後の史書もこの意味を踏襲する。更に、詩賦に特徴的な「不眠」の「展転」は、その原因を二つに分けることができる。一つは「男女別離」、一つは「士の不遇」である。前者は、『詩経』から古樂府や古詩へ。後者は楚辞系の作品に見え、蔡邕「青衣賦」もこれに近い。では、続く三国、西晋の詩賦に於ける「展転」はどうか。

三、三国・西晋の「展転」

三国期の詩賦に於ける「展転」の用例は五例。四例が「不眠」であり、一例のみ「変化」の例がある。

○応場「正情賦」(『芸文類聚』卷一八)

夫何媛女之殊麗兮、姿温惠而明哲。：還幽室以假寐、固展転而不安。

夫れ何ぞ媛女の殊麗たる、姿は温恵にして明哲なり、：幽室に還りて以て假寐すれば、固に展転して安んぜず。

○徐幹「室思」(『玉台新詠』卷一)

念与君相别、各在天一方。：展転不能寐、長夜何懸懸。念ふ君と相別れ、各おのの天の一方に在るを。：展転して寐ぬる能はず、長夜何ぞ懸懸たり。

○魏文帝「雜詩」其一(『文選』卷二九)

展転不能寐、披衣起彷徨。：鬱鬱多悲思、綿綿思故郷。

展転して寐ぬる能はず、衣を披きて起ちて彷徨す。：鬱鬱として悲思多く、綿綿として故郷を思ふ。

○郭遐叔「贈嵇康詩」其二(『古詩紀』卷一八)

展転反側、寤寐追求。

展転反側して、寤寐に追ひ求む。

●魏文帝「彈棊賦」(『芸文類聚』卷七四)

爾乃詳觀夫變化之理、屈伸之形、聯翩羸繹、展転盤縈。

爾して乃ち詳かに夫の變化の理、屈伸の形を觀れば、聯翩羸繹として、展転盤縈す。

応場「正情賦」は麗しき女性を思つて眠れられず、徐幹「室思」は女性が遠く離れた男性を思い、いずれも「男女別離」の系譜に連なる「不眠」の「展転」である。次の魏文帝「雜詩」は、故郷を思う男性の心情を詠んでおり、「望郷」が不眠の原因とされている。それ以前の例とはやや異なるものの、「別離」を原因とする点は同じであり、これも「男女別離」の系譜に連なるものである。また郭遐叔「贈嵇康詩」其二は、嵇康との別離を憂えた作品であり、これも「別離」を原因とする。

この四例と異なるのが、魏文帝の「彈棊賦」である。引用箇所では、棊の局面が変化するさまを「展転」を以て表現する。先述の如く、史書の「展転」は「変化・移動」の意で用いられることが多かった。しかし、この時

期前後の詩賦では、いまだ「不眠」の「展転」が主であり、「変化・移動」の用例は、この魏文帝「彈碁賦」のみである。

次に西晋の詩賦に於ける「展転」の用例は、左の五例であり、これらはいずれも「不眠」の「展転」である。

○傳咸「燭賦」(『芸文類聚』卷八〇)

何遠寓之多懷、患冬夜之悠長。独耿耿而不寐、待鷄鳴之未央。徒伏枕以展転、起燃燭於閑房。

何ぞ遠寓の懐ひ多く、冬夜の悠長たるを患ふ。独り耿耿として寐ねらず、鷄鳴の未だ央ぎざるを待つ。徒だ枕に伏して以て展転し、起ちて燭を閑房に燃やす。

○潘岳「悼亡詩」其二(『文選』卷二三)

歲寒無与同、朗月何朧朧。展転盼枕席、長簾竟牀空。

歲寒 与に同じくする無く、朗月 何ぞ朧朧たり。展転して枕席をかへりみ盼れば、長簾は牀の空しきに竟わたれり。

○潘岳「楊氏七哀詩」(『芸文類聚』卷三四作「哀詩」)

展転独悲窮、泣下霑枕席。

展転して独り悲しみ窮まり、なみだ泣下りて枕席を霑す。

○潘岳「懷旧賦」(『文選』卷一六)

宵展転而不寐、驟長歎以達晨。

宵に展転して寐ねられず、しばし驟ば長歎して以て晨に達す。

○潘岳「秋興賦」(『文選』卷一三)

宵耿耿而不寐兮、独展転於華省。悟時歲之適尽兮、慨俛首而自省。

宵に耿耿として寐ねられず、独り華省に展転す。時歳の適おはり尽くるを悟り、慨として首を俛たれて自ら省みる。

西晋期では、潘岳の詩賦に「展転」の用例が多い。潘岳の用例のうち、前三例はいずれも「死別」を原因とする。「懷旧賦」は、妻楊氏の父の旧宅を訪れた日の夜、義父とその二子が亡くなったことを思つて眠れないことを言い、「悼亡詩」其二・「楊氏七哀詩」はいずれも妻の死を悼んで眠れないことを言う。これらも「別離」がその原因となっており、「男女別離」の系譜に連なると言えよう。そして、この三作品とは異なるのが、「秋興賦」である。

三国・西晋期の「不眠」の「展転」は、「男女別離」又は「望郷」「死別」と、「別離」がその原因とされていた。西晋では傳咸「燭賦」も、長安にて夜に憂い多く、遠く故郷を思う心情を詠む。これに対して、潘岳「秋興賦」は、時の推移、老衰の不安が原因とされており、「士の不遇」により近いと言えよう。

以上、三国・西晋の「展転」を確認してきたが、この時期の「展転」も「不眠」が圧倒的に多く、「変化・移動」は一例のみである。そして「不眠」の原因は、新た

に「望郷」「死別」と「時の推移・老衰」とが加わり、前者は「男女別離」の系譜に連なり、後者は「士の不遇」の系譜に連なると考えられる。

四、東晋・劉宋の「展転」

東晋期の詩には、「展転」の用例は見当たらない。これはこの時期の現存する詩が極端に少ないからである。しかし詩以外の用例として、次の二例を見出すことができる。

張望「枕銘」(『北堂書鈔』卷一三四)

制為素枕、聊以偃仰。爾乃六安其形、展転唯擬、撫引応適、永御君子。

制して素枕を為り、聊か以て偃仰す。爾して乃ち六たび其の形を安んじ、展転して唯だ擬り、撫引して適に應ずれば、永く君子に御せん。

卞承之「無患枕贊」(『北堂書鈔』卷一三四)

長隔災氣永集靈祉。展転枕之、寤寐含喜。

長く災氣を隔て永く靈祉を集む。展転して之に枕せば、寤寐に喜びを含む。

張望「枕銘」は、『北堂書鈔』にこの数句が引用され、新たに作った「素枕」を何度か寝返りをうつことによつて、その形を整え、眠るに最適な形とすることを言うよ

うである。次の卞承之「無患枕贊」は、『芸文類聚』『北堂書鈔』『太平御覽』に序と本文が数句ずつ引用されており、引用句は『北堂書鈔』からの引用である。これは「無患」という木で作られた枕を詠んだ贊であり、この木で作った枕のすばらしさを詠み、「展転」はその枕の上で頭を動かすことを言う。

この東晋期の二作品は、いずれも「枕」を題材とした遊戯的な作品であり、「展転」の動作は「不眠」を意味せず、単なる寝返りの動作とする点で共通している。

次に劉宋期の「展転」は以下の五例である。

○卞伯玉「大暑賦」(『芸文類聚』卷五)

鬱邑兮中房、展転兮長筵。体沸灼兮如燎、汗流爛兮珠連。

中房に鬱邑とし、長筵に展転す。体は沸灼として燎かるるが如く、汗流爛として珠のごとく連なる。

○謝靈運「燕歌行」(『樂府詩集』卷三二)

誰知河漢淺且清、展転思服悲明星。

誰か知らん河漢淺く且つ清く、展転思服して明星に悲しむを。

●謝靈運「山居賦」自注(『宋書』謝靈運伝)

既入東南傍山渠、展転幽奇、異処同美。

既に東南に入りて山渠に傍へば、展転幽奇、処を異にして美を同じくす。

○謝惠連「秋懷詩」(『文選』卷二三)

如何乗苦心、矧復值秋晏。…耿介繁慮積、展轉長宵半。
 如何ぞ苦心を乗が^{しの}ん、矧^{いは}んや復た秋の晏るるに値
 ふをや。…耿介として繁き慮^{おも}ひは積り、展轉して
 長宵半ばなり。

●謝惠連「雪賦」(『文選』卷一三)

至夫繽紛繁鷺之貌、皓盱皦絜之儀、迴散縈積之勢、
 飛聚凝曜之奇、固展轉而無窮、嗟難得而備知。

夫の繽紛繁鷺の貌、皓盱皦絜の儀、迴散縈積の
 勢ひ、飛聚凝曜の奇に至りては、固に展轉とし
 て窮^{つひ}まり無く、嗟^あ得て備^{つひ}に知り難し。

劉宋期の「展轉」は、卞伯玉に一例、謝靈運と謝惠連
 にそれぞれ二例の用例が見いだせる。卞伯玉「大暑賦」
 は夏の暑さのために眠れないことを言い、寒さを原因と
 する後漢・蔡邕の「青衣賦」に近いが、蔡邕の作品のよ
 うに裏に不遇の憂いを読み取ることができないようであ
 る。謝靈運と謝惠連の例は、「不眠」(謝靈運「燕歌行」
 謝惠連「秋懷詩」と「変化・移動」(謝靈運「山居賦」
 謝惠連「雪賦」)が、それぞれ二例ずつとなっており、
 偶然かもしれないが、前者は詩の用例、後者は賦の用例
 となっている。

まず「不眠」の例から見ると、謝靈運「燕歌行」は遠
 く辺城で行役する男性を思う女性の心情を詠み、「男女
 別離」の系譜を継承する。一方の謝惠連「秋懷賦」は、
 人生の憂いを抱えて眠れない心情を詠み、「士の不遇」

の系譜に位置づけられる。

一方、謝靈運「山居賦」の自注は、南山の住居周辺の
 自然について説明しており、「展轉」は東南の山渠沿い
 には美しい自然があちらこちらに点在することを言う。

謝惠連「雪賦」は降る雪の変化するさまを、「展轉」を
 以て表現している。西晋以前の詩賦では、魏・文帝「彈
 碁賦」に例外的に用いられていた「変化・移動」の「展
 轉」が、劉宋期には、全体の用例数は少ないものの、そ
 の比率が高くなっている。

東晋期の張望と卞承之の例は、「展轉」を寝返りの動
 作とするが、西晋期の詩賦に共通していた「不眠」の意
 味がなくなり、また劉宋期に於いても、卞伯玉「大暑賦」
 は、「展轉」を「不眠」の意で用いているが、その原因
 は西晋以前に確認できた二つの系譜とはやや異なる。こ
 れに対して、謝靈運・謝惠連の詩の用例は、いずれも「不
 眠」の動作として「展轉」を用い、その原因も西晋以前
 の二つの系譜を継承する。また劉宋期の「展轉」に於け
 るもう一つの特徴は、二つの賦の用例がいずれも「変化・
 移動」の意で用いられていることである。

五、齊梁・北朝の「展轉」

(附)『詩経』から六朝期の「耿耿」

冒頭に指摘したように、齊梁期から初唐期に至るまで、
 詩に於ける「展轉」の用例は見出せない。東晋期にも「展

「展」の詩の用例を見出すことはできなかつたが、これは東晋期の現存する詩が極端に少ないからであろう。齊梁詩の場合は、しかし、それ以前の時期に比べて現存する作品数が多い。にもかかわらず、「展転」の用例が一例も見出せないことが、冒頭の疑問であつた。

しかし詩以外にも用例を求めれば、賦や散文などに次の五つの用例を見いだすことができる。

●張融「海賦」(『南齊書』張融伝)

湍轉則日月似驚、浪動則星河如覆。…、滄漣流瀨、展転縦横。

湍轉ずれば則ち日月驚くが似く、浪動けば則ち星河覆へるが如く、…、滄漣流瀨、展転縦横す。

●梁武帝「断酒肉文」(『広弘明集』卷二六)

此皆是殺業因縁、受如是果。若欲具列殺果、展転不窮尽、大地草木、亦不能容受。

此れ皆な是の殺業の因縁にして、是の如き果を受く。若し具さに殺果を列ねんと欲すれば、展転

窮まり尽きず、大地草木も、亦た容受する能はず。

○江淹「与交友論隱書」(『江淹集』卷五)

況今年已三十、白髮雜生、長夜輾転、乱憂非一。

況んや今年已に三十にして、白髮雜り生じ、長夜輾転して、乱憂 一に非ず。

○王僧孺「与何炯書」(『梁書』王僧孺伝)

又迫以嚴秋殺氣、具物多悲、長夜展転、百憂俱至。

況復霜銷草色、風揺樹影。

又た迫るに嚴秋の殺氣を以てせば、具物は悲しみ多く、長夜展転して、百憂俱に至る。況んや復た霜は草色を銷し、風は樹影を揺らすをや。

○陸倕「思田賦」(『芸文類聚』卷三六)

歲聿忽其云暮、庭草颯以萎黃。風颯颯以吹隙、燈黯黯而無光。独展転而不寐、何増歎而自傷。

歲聿に忽として其れ云に暮れ、庭草 颯として以て萎黃たり。風は颯颯として以て隙に吹き、燈は黯黯として光無し。独り展転して寐ねられず、何ぞ歎を増して自ら傷ましむ。

右の五例中、はじめの二例は「変化・移動」の「展転」である。張融「海賦」は波浪が縦横にうねるさまを、梁武帝「断酒肉文」は、殺業の因縁によつて生じる果報が至るところに現れて窮まりないことを言う。

残る三例は「不眠」の「展転」。この「不眠」の「展転」で注目されるのは、いずれも「時の推移・老衰」が、「不眠」の直接的な起因とされているところである。

江淹「与交友論隱書」は友人に対して隱遁の志を述べたものであり、引用箇所は隱遁の思いを果たせずに、時間過ぎゆくことを思つて夜も眠れずに憂えることをいう。王僧孺「与何炯書」は、湯道愍の誹謗によつて免官された王僧孺が友人の何炯に送った書であり、引用箇所は、己の現在の凋落を思い、万物が衰亡する嚴しい秋夜

に独り眠ることも出来ず、憂いが一層募ることを言う。また陸倕「思田賦」も時は推移して草木の衰亡することに感じて、独り眠られずに憂いを増し、隠遁の思いが沸き起こることを言う。

このように斉梁期の「不眠」の「展転」は、いずれも「時の推移・老衰」を起因として憂いが増し、それが故に夜眠れないことを言い、西晋以前では圧倒的に用例が多かった。「別離」を原因とする「展転」は見られないのである。

一方、北朝の詩文ではどうかであろうか。北朝では「展転」の用例として、次の用例を見いだすことができる。

○北魏・裴讓之「有所思」(『文苑英華』卷二〇二)

夢中雖暫見、及覺始知非、展転不能寐、徒倚独披衣。

夢中には暫く見ると雖も、覚むるに及びて始めて非なるを知る。展転して寐ぬる能はず、徒倚して独り衣を披る。

●北周・無名氏「三徒五苦辞」(『北周詩』卷六)

往反於五道、苦哉更死生。輾転三徒中、去来与禍并。

五道に往反し、苦しいかな死生を更む。輾転す三徒の中、去来 禍と并さる。

前者の裴讓之「有所思」は、古楽府「飲馬長城窟行」を模擬する作品であり、斉梁の詩文にはなかった、「男女別離」を原因とする例である。「三徒五苦辞」は、五

道に往還して生死の間を転々と移りゆくことを言うようである。このように北朝の二例は、「不眠」の例と「変化・移動」の例がそれぞれ一例ずつである。

さて、ここまで『詩経』から斉梁期に至るまで、稿者が目録しえた「展転」の用例を挙げて、各時期ごとに検討を加えてきた。ここで全体の流れをまとめておきたい。

まず第一に西晋以前の詩賦に於いて、「変化・移動」の「展転」は例外的に一例のみ魏文帝「彈棊賦」に用いられていた。それが、劉宋期では五例中二例、斉梁期でも五例中二例がこれに当たり、「変化・移動」の「展転」の用例数が増えている。第二に、西晋以前、「不眠」の「展転」は基本的に「別離」を原因としたのに対して、東晋期以後は「別離」を原因とする例は、謝靈運「燕歌行」と裴讓之「有所思」のみである。

はじめ稿者は、斉梁に於ける「展転」の変化に注目していたが、ここまでの検討によって、その変化は既に東晋・劉宋期にその兆しが窺えるようである。

そこで右の分析が妥当なのかどうかを確認するため、「展転」の類義語である「耿耿」についても、『詩経』から六朝期に於ける詩賦の用例を調べてみた。「耿耿」は、これも『詩経』を出典とし、心安らかならざる状態を言い、「展転」とは異なり、「不眠」の動作を直接示す語ではないが、「不寐」などの語と共に用いられ、西晋期以前は「不眠」の状態を表す場合が多い。この『詩経』から六朝期までの詩賦の用例を分析すると、

次の四つの意味に分類することができる。

一つは不眠の状態を示すもの、二つめは不眠の状態を伴わず、憂愁の状態のみを示すもの、三つめは堅く信節を守る状態を示すもの、四つ目は光り輝く状態を示すものである。紙幅の都合により、個々の意味を検討することができないので、文頭の記号を以て各作品の意味を示した。○は「不眠」を、△は「憂愁」、▲は「守節」、●は「輝光」の意で用いられていることを示す。

○『詩経』邶風「柏舟」

汎彼柏舟、亦汎其流。耿耿不寐、如有隱憂。

○『楚辞』遠遊

夜耿耿而不寐兮、魂煢煢而至曙。

●宋玉「大言賦」(『芸文類聚』卷一九)

方地為車、円天為蓋、長劍耿耿倚天外。

▲漢・劉向「九歎・惜賢」

進雄鳩之耿耿兮、讒介介而蔽之。

○漢・古樂府「長歌行」其二(『文選』卷二七)

昭昭素月明、暉光燭我牀。憂人不能寐、耿耿夜何長。

△漢・古樂府「滿歌行」(『宋書』樂志三)

戚戚多思慮、耿耿不寧。

○漢・応瑒「正情賦」(『芸文類聚』卷一八)

晝彷徨于路側、宵耿耿而達晨。

○魏・文帝「燕歌行」其二(『玉台新詠』卷九)

耿耿伏枕不能眠、披衣出戶步東西。

○魏・文帝「離居賦」(『芸文類聚』卷三〇)

愁耿耿而不寐、歷終夜之悠長。

○魏・曹植「洛神賦」(『文選』卷一九)

夜耿耿而不寐、霑繁霜而至曙。

○魏・郭遐叔「贈嵇康詩」其三(『古詩紀』卷二八)

明發不寐、耿耿極旦。

○西晋・傅咸「燭賦」(『芸文類聚』卷八〇)

耿耿而不寐、待鷄鳴之未央、

○西晋・傅咸「螢火賦」(『芸文類聚』卷九七)

夜耿耿而不寐兮、憂悄悄而傷情。

○西晋・曹摅「答趙景猷詩」(『文館詞林』卷一五七)

薄暮愁予、思亦終晨。耿耿不寐、媚茲良人。

○西晋・左九嬪「離思賦」(『晋書』左貴嬪傳)

夜耿耿而不寐兮、魂憧憧而至曙。

△西晋・晋拂舞歌「濟濟篇」(『宋書』樂志四)

衰老逝、有何期、多憂耿耿內懷思。

▲東晋・王羲之「用筆賦」(『墨池編』卷一)

髮指冠而皆裂、據純鉤而耿耿。

▲劉宋・謝靈運「隴西行」(『樂府詩集』卷三七)

耿耿僚志、慊慊丘園。善歌以詠、言理成篇。

●南齊・謝朓「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚

秋河曙耿耿、寒渚夜蒼蒼。(『文選』卷二六)

●梁・昭明太子「殿賦」(『昭明太子集』卷一)

接長棟之耿耿、簷垂溜於四隅。

●梁・何遜「日夕望江贈魚司馬」(『玉台新詠』卷五)

日夕望高城、耿耿青雲外。

● 梁・庾丹「秋閨有望」(『玉台新詠』卷五)

耿耿橫天漢、飄飄出岫雲。

▲ 梁・吳均「雉朝飛操」(『樂府詩集』卷五七)

蹀躞恒欲戰、耿耿恃強威。

○ 梁・吳均「行路難」其一(『玉台新詠』卷九)

班姬失寵顏不開、奉帚供養長信台。日暮耿耿不能寐、

秋風切切四面來。

△ 梁・簡文帝「序愁賦」(『歷代賦彙』外集卷一七)

雖復玉觴浮椀、趙瑟含嬌。未足以祛斯耿耿。

● 梁・朱异「還東田宅贈朋離詩」

蒼蒼松樹合、耿耿樵路分。(『文苑英華』卷二四七)

● 梁・庾肩吾「餞張孝總應令詩」

層台臨迴漲、耿耿晴煙上。(『芸文類聚』卷二九)

● 梁・劉孝綽「太子湫落日望水詩」(『初學記』卷六)

耿耿流長脉、熠熠動輕光。

● 梁・元帝「玄覽賦」(『文苑英華』卷一二六)

雖滔滔而直瀉、終耿耿而橫浮。

● 北周・王褒「飲馬長城窟」(『文苑英華』卷二〇九)

昏昏隴底月、耿耿霧中河。

● 陳・後主「有所思」(『文苑英華』卷二〇二)

团团落日樹、耿耿曙河天。

● 陳・張正見「賦得秋河曙耿耿詩」(『初學記』卷一)

耿耿長河曙、濛濛宿雲浮。

右のように、西晋以前は「不眠」の状態を示す例が圧倒的に多い。例外的な作品は、宋玉「大言賦」と劉向「九歎・惜賢」の二例であり、宋玉は長い剣が光り輝くさまを、劉向は雄鳩が小節を守るさまを言う。他に、心が安らかでない憂愁の状態を示す例が二例(古樂府「滿歌行」・晋拂舞歌「濟濟篇」)あるが、これは「不眠」の状態に近く、また用例数も少ない。

これに対して、東晋期以後の例では、逆に「不眠」の例は、吳均「行路難」のみであり、東晋・劉宋期の二例は堅く信節を守る状態を言い、齊梁期以後に至ると、光り輝く状態を示す例が圧倒的に多くなる。このように、「耿耿」の意味は西晋期以前と東晋期以後で鮮やかに変化しているのである。

やはり、問題はむしろ、西晋期以前と東晋期以後の変化にあると考えられる。では、なぜ東晋期前後で「展転」の系譜に変化が見られるだろうか。

六、継承されなかった「展転」の系譜

「展転」及び「耿耿」が、西晋以前と東晋以後で変化する理由として、まず考えられるのが劉宋期以後の新しい言語表現追究の風潮である。

『文心雕龍』明詩篇

宋初の文詠は、体に因革有り、莊老 退を告げて、

山水方に滋し、采を百字の偶に儷べ、価を一句の奇に争ひ、情は必ず貌を極めて以て物を写し、辞は必ず力を窮めて新しきを追ふ、此れ近世の競ふ所なり。

劉宋初期には、伝統と革新の二面があり、自然の美に注目した山水詩が多く作られるようになる。詩人たちは文采を飾り、新奇な表現を競い、その自然美をいかに巧みに写し出すかということ求めて新たな表現を追究した。また通變篇には次のように言う。

『文心雕龍』通變篇

推りて之を論ずれば、則ち黃唐は淳にして質、魏晉は淺にして綺、宋初は訛にして新なり。質従り訛に及び、弥よ近く、弥よ澹し。何となれば則ち、今を競ひ古を疎んじ、風の末は氣衰へたればなり。今才穎の士、意を刻して文を学び、多く漢篇を略し、宋集を師範す、古今備に閱すと雖も、然れども近きに付き遠きを疎んず。

ここで劉勰は、劉宋初期は新奇を好む傾向にあり、当代の作家たちは漢代の作品に目をむけることなく、劉宋の文集を範として、遠く古いもの軽視しているという。このように劉宋以後には、古代の作品を軽んじ、新しい趣向を好む風潮が有ったことが窺える。「展転」や「耿耿」の意味が変化することも、「愛奇」「新變」といっ

た、新奇さを好む当時の風潮に由来し、西晋以前に用いられた古い詩語やその用法が陳腐な表現として顧みられなくなつたからと説明できよう。

しかし、それは例えば『南齊書』文学伝に「習玩」と為り、事久しければ則ち瀆れ、文章に在りては、弥よ凡旧を患ふ。」と言うような、久しく使い続けられたが故に「凡旧」と感ぜられるという、時間の経過によつて当然起こりうる、自然な帰結だったのであろうか。

稿者はここで、ひとつの可能性について考える。それは、西晋以前とそれ以後で「展転」という詩語に変化が生じたのは、そこで文人の詩作を支える文化的基盤が異なつてしまつたからではないかということである。その原因とはもちろん、漢民族王朝が黄河流域から長江流域へと大きく移動したことによる。

そこで、東晋期前後の「展転」の用例をもう一度振り返つてみたい。西晋期に「展転」を多く用いていたのは、潘岳であつた。この潘岳について、高橋和己氏「潘岳論」(『中国文学報』七 一九五七、のち『高橋和己作品集 九・中国文学論集』河出書房 一九七二)に、次の如き興味深い指摘がある。以下、引用が少し長くはなるが、本稿の立論に当たつて必要な箇所を示す。なお、引用文中の傍点は稿者による。

と言うのは、――つまり今、この様に三首一篇構成に拘泥するのは、――総じて潘岳の詩が、古代民歌や古

詩十九首や南北朝樂府のあるものと、着想・思想に於いて非常によく似ている事と、彼と同時代の作品に、三首一篇構成であったのではないかと疑われる詩篇が他にも存するからである。(三一頁)

他ならぬ同時代に一流の文学の條件の一つをその発想の獨創性に置こうとした主張がなされていた事は事實なのである。……ところが、潘岳はそうはしなかつた。と言う事は、潘陸と併稱され、同じ西晋時代の修辭主義の主導者と認められる二者の文学態度に何か根底的に違つたものがあつた事を意味する。陸機の方が西晋時代ではより特殊なものだが、しかし又一方陳祚明が言うように詩のジャンルでは陸機の方が古法にのつとつてゐる。そして、文学全体の態度から言えば、潘岳の文学が、今迄人が注意しなかつた別のある系譜に屬したのではないかと言う疑念をも喚起する。(三七頁)

この後、氏は潘岳の詩句中、古詩及びそれに類するものと表現が類似する例を列挙した上で、次のように言う。

私はことさらに瑣末を好む穿鑿癖はない。單に語彙上の踏襲に止まるなら、一々列舉する迄もな事である。しかし、既に指摘した彼の文学の特長の殆ど大部分が、皆、民歌乃至は民歌的なものの特長と重な

つてゐることを見逃すわけにはいかない。(四〇頁)

このように氏は、潘岳の文学が民歌乃至は民歌的なものの影響を強く受けてゐることを明らかにする。更に氏は、この民歌の影響は潘岳に限られたものではなく、広く西晋文学全体に指摘しうる特徴ではないかと述べる。

その源流指摘は、詩品の説を些か訂正する必要があると私は思う。と言うのは詩品の系譜では、古詩の直系の子孫は劉楨公幹(170?~217)であり、更にそれは左思太冲に受繼がれるとするが、古詩及び古樂府の持つ作用力はもつと強烈且つ廣汎なものだつたと思われる。又、私は嚴密に定義せずに西晋文学の修辭主義なる言葉を用いて来たけれども、その修辭主義はただ漫然と美しい言語を志向するのではなく、瞭りと、より美しく仕上げんとした、對象があつたのである。(四一頁)

このように氏は、潘岳の文学を起点として、古樂府や古詩は西晋の文学に強烈且つ廣汎な作用力を持ち、そして、西晋文学の修辭主義とは、より美しく仕上げんとした對象、すなわち古樂府や古詩という明確な對象が存在したことを示している。

前節までに述べたように、西晋以前の史書と詩賦では、「展転」の用いられ方が異なり、詩賦特有の「不眠」の

「展転」は、その原因によって二つに分けることができた。「男女別離」は『詩経』に始まり漢代の古楽府や古詩に、一方の「士の不遇」は楚辞系の作品に見られる。そして三国・西晋期の「展転」には、後者よりも、前者の系譜に連なる作品が多かった。また「不眠」の「耿耿」も、『詩経』に始まり、漢代では古楽府にその用例が多く見られる。

これは「男女別離」を原因とする「不眠」の「展転」が、もともと民歌特有のものであったこと、三国・西晋期にはまだその民歌的発想や表現が当時の文学に作用していたことを示しているのではあるまいか。ところが東晋期に至り、漢民族文化の中心が、黄河中流域から長江下流域に移動したことにより、それまでの文学、特に詩作に作用していた民歌という基盤——ここでは特に北方の民歌を意味する——が失われてしまった結果、西晋以前の「展転」の系譜は途絶えてしまったのではないか。¹⁹⁾

その可能性は、東晋・劉宋以後の「展転」の用例にも窺える。東晋期以後の「展転」の用例で、「別離」による「不眠」の例は、謝靈運「燕歌行」と裴讓之「有所思」の二例のみであった。また東晋期以後の「耿耿」では、呉均「行路難」のみが、西晋期以前と同じく「不眠」の状態を意味していた。この三作品に共通することは、それが擬古楽府であるということである。

擬古楽府とは言うまでもなく、漢魏の古楽府又は西晋期以前の楽府詩を模擬した作品である。謝靈運らが、「展

転」や「耿耿」を古楽府やその流れを汲む古詩に由来する語とまで意識していたかどうかは分からない。しかし、少なくとも、これらが西晋期以前の古い用法であることは認識していたであろう。

西晋期以前の詩と、古楽府やその流れを汲む古詩とが、もし高橋氏の指摘するように密接な関係にあったならば、西晋から東晋へと、漢民族文化の中心が移動したことに伴って、その関係も断たれしまったであろう。もちろん完全にその関係が断絶したわけではないであろうが、以前のような密接な関係が失われたことは確かである。そして、その民歌という基盤が失われたことは、その詩語の生命——或いは拘束——が失われてしまったことを意味する。以後の詩人にとって、その詩語が「凡旧」と感じられ、「新変」されるのは、その詩語が基盤を失い、その生命が失われてしまったからではなからうか。

七、結び — 盛唐・中唐詩の「展転」 —

最後に、斉梁期から初唐期に於いて、一時詩に用いられなくなった「展転」が再び詩に用いられるようになる盛唐期から中唐期の状況について触れ、本稿での「展転」の系譜に関する考察を終えたい。

盛唐詩の用例は、まず杜甫の詩に四例見出せる。²⁰⁾

●杜甫「橋陵詩三十韻因呈鼎 諸官」（天宝十三載）

綺繡相展転、琳琅愈青熒。

綺繡 相展転し、琳琅 愈いよよ青熒たり。

●杜甫「乾元中寓居同谷峽作歌」七首其二（乾元年間）

生別展転不相見、胡塵暗天道路長。

生別展転して相見えず、胡塵 天を暗くして道路長し。

○杜甫「水宿遣興奉呈群公」（大曆三年）

蹉跎長泛鷁、展転屢鳴鷄

蹉跎つたきて長く鷁を浮かべ、展転して屢しばしばば鳴鷄あり。

○杜甫「秋日荆南述懷三十韻」（大曆三年）

蒼茫歩兵哭、展転仲宣哀。

蒼茫たり 歩兵の哭、展転す 仲宣の哀。

右は制作年代順に配列しているが、杜甫は初めの二例は「変化・放浪」の意で用いており、のちに「不眠」の動作を示すものとして用いている。ちなみに「不眠」の原因はいずれも「士の不遇」である。

この他に、杜甫に近い時代の詩人ではもう一例、孟雲卿という人物に「展転」の用例が見出せる。

○孟雲卿「古別離」

君行本迢遠、苦樂良難保。宿昔夢同衾、憂心常傾倒。

含酸欲誰訴、展転傷懷抱。

君が行は本より迢遠にして、苦樂 良に保ち難し。

宿昔 同衾を夢みるも、憂心 常に傾倒す。酸を

含みて誰にか訴えんと欲す、展転して懷抱を傷ましむ。

この孟雲卿「古別離」は、遠く離れた男性を思う女性の心情を詠み、古樂府「飲馬長城窟行」などに類する作品であり、「展転」も「男女別離」の憂いによる「不眠」の動作を示す。

孟雲卿の生涯を知る資料は少ないが、『唐才子伝』に拠れば、彼は天宝年間に科挙を受験したが及第せず、各地を放浪して、薛勗や杜甫らと交友を結び、のちに仕えて校書郎となった。詩作に巧みで、当時古調では彼の右に出るものはなかったと言う。彼の現存する詩も古樂府題を用いるものが多く、擬古樂府を得意とした詩人であったようである。

ここで注目されるのが、孟雲卿に杜甫との交流があることである。『唐才子伝』には、孟雲卿が荊州に流寓した時、杜甫と贈答詩を交わし、杜甫は彼を「甚だ愛重②したと言う。杜甫の詩には孟雲卿に贈った詩が三例有り、その制作時期は乾元元年から大曆元年の間、二人の出会い、それより以前、杜甫が華州司功參軍として長安を去る以前と推測される。そして、杜甫の「展転」の用例が、「変化・移動」から「不眠」に変化するものも、乾元年間以後である。

また『唐才子伝』は、孟雲卿との贈答詩の応酬がある人物としても一人、韋応物の名を挙げるが、この韋応

物にも、杜甫、孟雲卿に続いて、不眠の「展転」を用いる詩がある。

○韋応物「子規啼」（大曆十三年？）

鄰家孀婦抱兒泣、我独展転何時明。

鄰家の孀婦 兒を抱きて泣き、我独り展転して何れの時か明かならん。

○韋応物「朝請後還邑寄諸友生」（大曆十四年）

誰言再念別、忽若千里行；況茲昼方永、展転何由平。

誰か言はん 再び別れを念ふを、忽として千里行くが若し。：況んや茲の昼の方に永きをや、展転何に由りてか平らかならん。

韋応物には「展転」の用例が二例。「子規啼」は、劉辰翁が「此必悼亡後作」と言い、大曆十三年頃、妻と死別した己の孤独を歎いた作品とされる。また「朝請後還邑寄諸友生」は、友人と別れた後の孤独を憂えた作品であり、いずれも「別離」による「不眠」を言う。

韋応物が孟雲卿と出会ったのは、彼が広陵を訪れた時であり、その贈答詩「広陵遇孟九雲卿」は大曆八年の作とされる。先の二作品の制作時期に誤りが無ければ、韋応物は孟雲卿と出会って後に、「展転」を用いたこととなる。或いは、盛唐期に西晋以前の古い用法、すなわち「別離」による「不眠」の動作として、「展転」を詩に用いたのは孟雲卿がはじめであり、彼を経て杜甫や韋応

物も、これを用いるようになったのかもしれない。

右の推測はともかくとして、斉梁期以後に詩語として用いられなくなった「展転」は、盛唐末期に至って再び詩に用いられる。韋応物以後もまだ、「展転」を「変化・移動」の意味として用いる詩もあるが、韓愈、白居易、元稹、劉禹錫など中唐期の詩人は、おおむね「不眠」の動作として「展転」を用いており、^②是に於いて「不眠」の「展転」は一般的な詩語として定着したようであらう。

「展転」は、『詩経』以来の伝統を有する詩語である。しかし、その歴史は必ずしも平坦で、自然なものではなかったようである。その生命は一度は失われ、詩語としては消滅するという困難な時期を経、盛唐期に至ってその価値が見出され、再び生命を与えられる。そして、白居易が、楊貴妃の死を悼む玄宗の深い哀しみを凝縮したことにより、「展転の思ひ」は今もなお、読む人の心を動かすのである。

本稿では、『詩経』から中唐期に至る「展転」の系譜を追い求めた結果を基に私見を提示したが、調査の杜撰、誤読など、問題も多々存するかと思う。諸賢のご教示ご批評を切に乞い、更に多くの詩語の用例を検討して、このたびの考察を深めてゆきたい。

(注)

① 「関雎」詩序に「関雎后妃之徳也。：是以関雎樂得淑女以

- 配君子。憂在進賢。不淫其色。哀窈窕思賢才而無傷善之心焉。是閔睢之義也。」とある。また「輾反側」する人物を、毛伝、鄭箋ともに賢女を求める皇后とする。
- ② 「沢陂」詩序に「沢陂刺時也。言靈公君臣淫於其国男女相説。憂思感傷焉。」と言う。また「輾反側」する人物を、毛伝は男女の乱れを憂える君子とし、鄭箋は愛する人を恋い慕う人物とする。
- ③ 『詩集伝』に「此詩大旨与月出類。」とあり、陳風「月出」には「此亦男女相悦而相念之辞。」と言う。
- ④ 「展転」の用例検索には、遠欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』及び嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』を用いた。後掲する「耿耿」の用例検索も同様に行つた。
- ⑤ 『玉台新詠』卷二は蔡邕の作とする。
- ⑥ このほかに、妻が繰り返し夫の身を思うと解する説もあるが、前後の用例から考えてこの説には従い難い。
- ⑦ 嚴可均『全晋文』には、この他に釈氏の文章にも「展転」の用例が見られる。例えば、釈道安「合放光讚略解序」に「路経涼州、写而因焉、展転秦雍。」とあり、釈僧叡「思益経序」には「此経天竺正音、名毗絶沙、真諦。是他方梵天殊特妙意菩薩之号也。詳聴什公伝訳其名、翻覆展転。意似未尽。」とある。釈氏の用例はいずれも史書と同じく、「変化・移動」の意で用いられており、それは六朝期全体に言える。そこで本稿ではこれを史書の用例と同じとみなして、以後特に言及しない。
- ⑧ 『芸文類聚』卷二十六は「与何遜書」に作る。
- ⑨ 『詩経』邶風「柏舟」の毛伝に「耿耿猶傲傲也」とあり、『楚辞』遠遊の王逸注に「耿耿、猶傲傲、不寐貌也。」と言う。
- ⑩ 『芸文類聚』は「耿介」に作るが、今は『文選』張衡「思玄賦」李善注に従う。
- ⑪ 一に「傷歌行」に作る。『文選』『芸文類聚』『樂府詩集』はこれを樂府古辞とするが、『玉台新詠』卷二にも同じ内容の作品があり、魏明帝の作とする。
- ⑫ 『玉台新詠』注に「一作眇眇」とある。しかし、ここは庾肩吾「餞張孝総応合詩」と同じく、雲の上に高くそびえる建物が、(夕日を浴びて)光り輝く状態を言うとも解釈できよう。
- ⑬ 『玉台新詠』注に「一作眇眇」とある。
- ⑭ 王逸注に「耿耿、小節貌。」とあり、また「言己欲如雄鳩、進其耿耿小節之誠信、讒人尚復介隔蔽而障之。」とある。
- ⑮ 齊梁期の詩賦では、「憂愁」の状態を示す例は梁簡文帝「序愁賦」一例のみであるが、東晋期以後の書簡文では、「耿耿」を「憂愁」や「不安(心配)」の意で用いる例が多い。例えば、王羲之「雜帖」に「知足下哀感不佳、耿耿。」とある。
- ⑯ 『文心雕龍』序志篇に「而去聖久遠、文体解散、辞人愛奇、言貴浮詭、飾羽尚画、文繡鑿斲、離本弥甚、将遂訛濫。」とある。
- ⑰ 『南齊書』文学伝に「習玩為理、事久則瀆、在乎文章、弥患凡旧。若無新变、不能代雄。」とある。
- ⑱ 例えば、矢嶋美都子氏「樓上の思婦」(『日本中国学会報』三七一九八五)は、思婦を詠じた漢代の古詩のモチーフをAとGの六種類に分類し(F「寝れずにいる、長歎息する」)、

A 「楼上にいる」以外のモチーフは、「唐詩へ至るまでにすでに陳腐な型となり殆んど顧みられなくなってしまった。」（一〇六頁）と言う。

⑲ この他に「感物」という詩語も、古楽府や古詩などに源を發し、西晋期以前と東晋期以後ではその用法が異なっている。この「感物」については、後日稿を改めて論じたい。

⑳ 以下の引用作品は、『全唐詩』をテキストとした。

㉑ 杜甫「酬孟雲卿」（乾元元年六月）、同「冬末以事之東都湖城東遇孟雲卿復歸劉顥宅宿宴飲散因為醉歌」（乾元元年冬）、同「別崔暎因寄薛拋孟雲卿」（大曆元年）。

㉒ 中唐期の詩における「展転」の用例は次のようである。

● 戴叔倫「送張評事」「楊花展転引征騎、莫怪山中多看人。」

● 權德輿「丙庚歲苦貧戲題」「巧智競憂勞、展転生澆漓。」

○ 韓愈「暮行河堤上」（貞元十五年）

「夜歸孤舟臥、展転空及晨。」

※原因Ⅱ不遇

○ 韓愈「陪杜侍御遊湘西兩寺獨宿有題一首因獻楊常侍」（永貞元年）

「展転嶺猿鳴、曙燈青睽睽。」

※原因Ⅱ不遇

○ 白居易「長恨歌」（元和元年）既引

※原因Ⅱ死別

● 元稹「台中鞠獄億開元觀旧事呈損之兼贈周兄四十韻」（元和四年）

「既迴教子顧、展転相連攀。」

● 元稹「答姨兄胡靈之見寄五十韻」（元和五年）

「鉛鈍丁寧淬、蕪荒展転耕。」

○ 元稹「解秋」十首其九（元和九年）

「西風冷衾篔、展転布華茵。」

※原因Ⅱ死別

○ 白居易「山鷓鴣」（元和十年）

「夢鄉遷客展転臥楼上、抱兒寡婦彷徨立。」 ※原因Ⅱ望鄉
○ 劉禹錫「月夜憶樂天兼寄微之」（太和三年）
「展転相憶心、月明千万里」 ※原因Ⅱ離別

〔附記〕本稿は、第五十回中国四国地区中国学会大会（平成十六年五月二十九日於広島大学）に於ける口頭発表の一部をまとめたものである。当日、諸先生方から多くのご教示ご批正を賜りましたこと、ここに記して深く感謝申し上げます。